慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム・スミスの理論経済学概論
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.7 (1923. 7) ,p.1076(102)- 1129(155)
JaLC DOI	10.14991/001.19230701-0102
Abstract	
Notes	アダム・スミス生誕二百年記念号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230701-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アダム・スミスの理論經濟學概論

小泉信三

（一）

Wealth of Nations に現れたる Adam Smith の經濟學體系がその Glasgow 大學に於ける道德哲學の講義に胚胎するものなることは、既に周ねく人の知るところなり。是より先き Glasgow 大學に於ける道德哲學講座の擔當者は、講義の一部門として經濟學を講ずることを常とせしが、一七五一―二年前任者 Thomas Craigie 病氣の爲めに俄に代講者として、次いで正教授として、此講座の擔當を命ぜられたる Adam Smith は、半ば大學の慣例に從ひ、半ば自己の趣味と必要とに促されて、比較的多量の經濟學講義を其中に試みたり。（The Wealth of Nations edited dy Edwin Cannan, Editor's Introduction pp. XXXIII-XXXVI）而して道德哲學講義全體の中に於て經濟學が如何なる位置を占めたりしかは、聽講者の一人たりし後の法律學教授 John Millar の Dugald Stewart に談れるところに由つて明かなり。是に據るときは Smith の講義主題は四部に分れたり。神の存在及び屬性の諸證左並に宗教の基礎となる人心の諸原理を論ずる自然神學、後に Theory of Moral Sentiments 中に公にせられたる狹義の倫理學、及び道義中正義（justice）に關する部門の考察は、各々此四部中の前三部をなし、而して第四部は後に大成して Wealth of Nations となるに至りしものを內容とせり。此の第四部に就て Millar が語れるところは左の如し。

「其講義の最後の部分に於て氏（Smith）は正義（justice）の原則を基礎となさず、便宜（expediency）の原則に基き、一國家の富と力と繁榮とを增進せしむることを目的とする彼の政治的諸制規（political regulations）を吟味せり。此見地の下に氏は、商業、財政、宗教的並に軍事的施設に關する政治的諸制度（political institutions）を考察せり。氏が此等諸問題に就て講述せるところのものは、氏が後年 An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nations なる標題の下に公表せる著作の要旨を其內容とせり」（Dugald Stewart, The Life and Writings of Adam Smith, LL.D. in The Works of Adam Smith, London 1811 vol. V. p. 415）

然れどもSmithはその始めて道德情操論を著したる時に於ては、未だ一科の獨立せる經濟學の樹立を思ふに至らずして、法律及び政治に關する一著述の中に其經濟學說を述べんとする考案を有したるものゝ如し。即ち道德情操論の最終節に於て、彼れは「…別の一論稿に於て、啻に正義に關する事項のみならず、また警察收入並に軍備(police, revenue and arms)及び苟も法律の對象たるべき自餘一切のものに關する事項に於て、法律及び政治の一般原則とその社會の樣々なる時期時代に於て閲みしたる樣々の變革とを記述せんことを試むべき」ことを約束し、而して其沒年(一七九〇年)に訂正刊行せられたる同書第六版の序文中此約束に言及して、「諸國民の富の本質と原因とに關する研究に於て、予は此約束の一部を履行したり。少くもその警察收入及び軍備に關する限りに於ては之を履行したり。殘るところのもの、即ち予が久しく計劃せる法學論は、今日まで本書訂正の業を妨げたりしと同じ職務の爲めに其履行を妨げられたり」と記せるなり。

此のAdam Smithの當初計劃の著述中に於て經濟學が如何なる地位を占むべかりしやは、幸にして保存發見せられたる其正義、警察、收入及び軍備に關する講義の筆記(Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms.- Delivered in the University of Glasgow by Adam Smith, Reported by A Student in 1763 and Edited with An Introduction and Notes by Edwin Cannan, 1896)に由つて略ぼ之を窺ふことを得べし。此講義に於てSmithは法學(jurisprudence)を定義して「一切諸國民の法律の基礎たるべき一般諸原則を研究するの學」又は「法律及び政治の一般諸原則の理論なり」と云ひ、(ibid., pp. 1, 3)而して正義警察收入及び軍備を以て法律の四大目的となせるなり。而して更に此四大目的を說明して曰く、「正義の目的は侵害に對する保障(security from injury)にして、之は政府の基礎たるものなり。

「警察の目的は貨物の低廉と(若し次の二項目が此種の講義に取つて微細に失することなしとせば)公安と清潔となり。此項目の下に吾人は一國家の富(opulence)を考察すべし。

「同じく必要なるは、其時と勞働とを國務の爲めに捧ぐる官吏の是に對する報償を受くべきこと是なり。此目的の爲めには、且つ政府の經費を支辨せんが爲めには、基金を調達せざるべからず。此に於てか收入あり。此項目の下に於ける考察

題目は、租稅關稅等に依りて人民より徵收せざるべからざる收入の最も適宜なる賦課方法なるべし。大體に於て、收入の最も感知せらるゝことなくして人民より徵收せらるゝものは、之を先にせざるべからず。次いで英國並に他の歐羅巴諸國の法律が如何なる程度まで此目的に適へるかを示さんとす。

「政府にして外國の侵害及び攻擊に對して能く自ら防ぐにあらざるよりは、最良の警察と雖も公安を保つこと能はざるを以て、法律に由つて指定せらるゝ第四事項は、此目的の爲めに存するものなり。而して此項目の下に於ては、各種の軍備と其長短、常備軍民兵等の組織を說くべし。

「最後に考察せらるべきは國際法(laws of nations)にして此項下に含まるゝは、一獨立社會が他の社會に對して有すべき要求、外人の權利、及び開戰の適當なる理由是なり」と。(ibid., pp. 3-4)

警察の項下に「一國家の富」を論ずと謂ふに對しては恐らく奇異の感を抱くものあるべし。然れども是は police なる語に由つて Smith の解するところが今人と同じからざるに由るものなり。曰く、「警察は法學の第二の大分科なり。此名稱は佛蘭西語にして、本と希臘語の πολιτεία に出づ。此は本來政府の政策の義なりしが、今は僅かに政治の下級部分の制規、即ち清潔安固及び低廉又は豐富を意味するに過ぎず」と (ibid., p. 154) 而して Smith に取りては低廉と豐富とは事實上同一事にして、又「低廉若しくは豐富の考察」は「富と豐饒とを獲得すべき最も適當の方法」の考察に外ならざるなり。然れども「此等便益を取得べき最適當なる方法を確知せんが爲めには先づ富裕の何たるかを明にすること必要なるべし……」(p. 157) 乃ち彼れは人間の自然的欲望の論を以て發途し、分業論に進み、次いで約百頁に亘りて後に國富論に論述せられたる幾多重要の經濟學說を述ぶ。大著國富論は法學の一分科たる警察論中の最要項目たる經濟政策論の發展膨脹して大成したるに外ならざるものなり。

（二）

「便宜の原則に基きて」考察するとき、「一國の富と力と繁榮とを增進せしむる爲めには如何なる「政治的制規」を取るべきか。「富と豐饒とを獲得すべき最適當の方法」は果して何ぞ、彼れが是に對する解答は消極的なり。一國を富裕ならしむる爲

めには、權利侵害の行はれざらんことを保障するの外、原則として一切の「政治的制規」を無用となしたるなり。Smith の最初の傳記者 Dugald Stewart は記すらく「諸國民の政策を其法律の最重要なる一部門、即ちその political economy の體系を形成する諸法律に關して指導すること、是れ Smith 氏の『研究』の大目的なり。……氏が當時〔道德情操論の最終節に於て〕豫告し、而して後年氏が其中の爾かく尊重すべき部分を其國富論中に公にしたる政治的思辯の目的は、正に此等重要なる諸事項に關して立法者の施設を指導すべき一般的諸原則を確かむることに存じたりき」。而して此政策の最高原則は「正義の規則を遵奉する限り、各人をして其自家の利益を其任意の方法に於て追求し、其勞働と其資本とを其同胞市民のそれと最も自由に競爭せしむることに由つて、自然の指摘せる彼の事物の秩序を維持すること」是なりと（Works vol. V. pp. 484, 485, 491）。此意味に於ける Smith の面目は、就中最もよく國富論第四篇マアカンタイル・システム批評の中に發揮せらる。此諸章に於て Smith の所説は理路最も一貫し、其文字は最も精彩に富み、此の寛厚の長者もその政府の偏頗なる政策、特惠の庇護に浴する階級の我慾を排擊するに當りては、敢て其用語の辛棘激越の調を帶び來ることを禁ぜざりしなり。然りと雖も一の富國政策の取るべきことを立證せんが爲には、先づ國富の何たるかと、其增減の原因とを説明する經濟理論なかるべからず。Smith の國富論は規模頗る大なる系統的著述にして、決して一個の時務政策論を以て目すべきものにあらずと雖も、猶且つその始め法學の一分科たる警察論中の一重要項目より漸次發展して獨立の系統を成すに至りし經過に徵しても、國富論第一第二兩篇中に説かるゝ經濟理論に、自由主義經濟政策主張の爲めの基礎準備として發達し來れる一面あることを否むべからず。Smith が political economy なる語を、或は國富を研究對象とする一科の學の義に用ゐ、或は富國政策又は富國策論の義に用て一定するところなきは異しむに足らざるなり。Smith はフイジオクラアトを論ずるに方りて、諸國民の富の本質と原因とを究むるものとしての political economy を云くり（Wealth of Nations vol. II, p. 177）、全卷の緒論に現はるゝ著者の態度は略ぼ此と一致するものにして、彼れは其目的の國富の本質原因を説明するにあることを明言せるなり。即ち曰く「各國民の年々の勞働は本來これにその年々消費する一切の生活必需品並に便宜品を供給する基本

たるものなり。……人民の大團體の所得は何を以て成りしか、或は樣々の時代、樣々の國に於て彼等が年々の消費に供給したる是等基本の本質は何なりしかを説明するは、此の最初の四篇の目的なり。第五、即ち最終篇は君主の收入を論ず」と。又曰く「勞働生産力の此增進の諸原因と、其生産物が社會の樣々の階等、樣々の狀態の人の間に自然に分配せらるゝ順序とは、此研究の第一篇の主題をなすものなり。第二篇は……資本の本質とその漸次に蓄積せらるゝ態樣と、及びその利用せらるゝ方法の如何に由りてその活動せしむる勞働量の樣々なることとを論ず。……此政策〔商工偏重の政策〕を導入し確立したるの觀ある諸事情は、第三篇に説明せらる。……予は第四篇に於て成るべく充分、成るべく明瞭に、彼の諸學説〔重商重農の諸學説〕とその樣々の時代、樣々の國に於て生じたる主要の結果とを説明せんと試みたり」と（Wealth of Nations pp. 1, 2, 3.）。此等緒論中の諸章句に由て窺はるゝ著者の態度は、一事の當さに爲すべく、或は當さに爲すべからざることを主張する者の態度にあらずして、可否の論斷を離れて、單に事實を事實として説明せんとする理論家の態度なり。唯僅かに第五篇に關して「此〔第五〕篇に於て、予は第一に君主の必要なる經費の何なるか、……此等諸經費中の何れのものが當さに全社會の一般的貢獻に依つて支辨せらるべきかを示さんと努めたり」と云ふ點に於て、其態度を殊にすることを認むるのみ。

然れども Adam Smith の經濟學觀は、必しも常に上記諸節に示さるゝが如くならず。渠は國富增進の爲めに當さに取るべき政策其者、或は斯る政策の是非を論ずる學の意義にも political economy の語を用ふるなり。即ち國富論第四篇の緒論に曰く「政治家又は立法者の學の一分科として考へられる political economy は、異なる二個の目的を志すものなり。第一は、人民の爲めに豐富なる所得、即ち生活資料を給すること、更に一層正しく云へば、彼等をして能く自ら斯の如き所得又は生活資料を給せしむること、第二は國家又は共和國（commonwealth）に供給するに其公務の爲めに充分なる收入を以てすること是なり。そは人民と君主とを共に富まさんことを志すものなり」と。別の處に於て Smith は又「各國の國富と、力の富に倚賴する限りにおて各國々力とは、常に一切の租稅の究極それよりして納付せらるべき基本たる其年生産の價値に比例せざるべからず。然れども各國 political economy の大目的

は、其國の國富と國力とを增進せしむること即ち是なり」と謂ひ（vol. I, p. 351）、或はQuesnai 氏は政治的身體に於て、各人が絕えず行ふ自家境遇を改善せんとするの努力は、「多少偏頗にして且壓制的なるpolitical economyの惡結果を幾多の點に於て豫防し、且つ矯正し得る保存の原理たることを考察せざりしものゝ如し。斯るpolitical economyは一國民の富と繁榮とに向ふ自然的進步を多少遲からしむること疑を容れずと雖も、必しも常に全然之を阻止すること能はず、況や之をして退步せしむることをや」と謂ひ（vol II, p. 172）又或は「近世歐羅巴諸國民のpolitical economyが、田舍の產業たる農業よりも都市の產業たる製造業及び外國貿易に有利なりし如く、他の諸國民の夫れは別の途を履みて製造業及び外國貿易よりも農業に有利なりき。支那の政府は他の一切の業務よりも農業に幸ひす。……」と謂へるなり（ibid., p. 177）。たゞ國富論緖論は全卷脫稿の後に草せられしものならんとの推測を念頭に置き、而して國富論が始め僅かに警察論の一重要項目たるに過ぎざりしものゝ發展大成したるものなることを思ふときは、Smithの興味の重心が一個の經濟政策學としてのpolitical economyより漸く理論的經濟學としてのpolitical economyに移動し來れるの形迹あるは之を認むることを得べし（W. Hasbach Untersuchungen über Adam Smith, 1891, S. 217-221）。

（三）

國富（Wealth of Nations）とは何ぞ。Smithの曰く一國の「勞働と土地との年生產物」は「其全住民の眞の富と所得」とを成すものなりと（vol. I, p. 320）、又曰く「各國民の年々の勞働は本來これにその年々消費する一切の生活必需品並に便宜品を供給するものにして、是等必需品並に便宜品は、或は彼の勞働の直接生產物を以て成るか、或は此の生產物を以て他國民より購入せるものを以つて成るか孰れかなり」と（vol. I, p. 1）。即ちSmithが所謂國富の本質は、國民が年々消費する必需品便宜品にして、所謂國富の原因は勞働なるものと解することを得べし。（Bonar, Adam Smith, Dictionary of Political Economy vol. III, 413 參照。Leser はその Der Begriff des Reichthums bei Adam Smith, 1874 に於てSmithがwealth, riches又はopulenceなる語を多く主觀的狀態の義に用ゐて客觀的物體の義に用ゐざりしことを縷說せりと雖も、此の富有の狀態は管に所得に由りて決せらるゝのみならず、富の本質原因の研究は、即ち所得の

本質原因の研究にして、而して所得（revenue）は享樂財を以て成ることはその認むるところなるを以て（S. 16, 20）渠の結論は本文所述と甚だ異なるものにあらず）。既に勞働を以て國富の原因なりとすれば、國富の大小、即ち國民が生活必需品便宜品を供給せらるゝことの豐富なると否とは、勞働生産力の大小と、國民中是等貨物の生産を擔當する者の占むる比例とに由て決せらるゝこと明なり。Smithは國富論第一篇に於て右の第一の問題に答へ、同第二篇を以て第二の問題に對する解答に充てんとす。若し國富論の緒論にして正しく本文諸篇の内容に適合するものなりとせば國富論に示さるゝ經濟學系統は、此の二個の問題を中心として構成せられたるものと謂ふことを得べし。

勞働の生産力を增進せしむるものは何ぞ。Smithは緒論中に其「諸原因」と云ふも、第一篇本文に依れば渠は分業の一事を擧ぐるの外他に何物をも説くことなし。分業は熟練を高め、時間を節約し、新機械の發明を促して以て勞働の生産を增進せしむ。然れども分業の行はるゝ程度は、交換の範圍即ち市場の廣狹に由て制限せられざるを得ず。物々交換の困難は貨幣を發生せしむ。而して貨幣論は貨物の價値、又は「人が貨物を或は貨幣と交換し、又は他の貨物と交換する上に於て自然に遵奉する規則」の論に導き到らしむ。一貨物の價値はその支配する勞働量に由つて最も正確に測定せられ、又貨物の生産に參加せる勞働資本及び土地に對する報酬たる賃銀利潤及び地代の三者に分解せらる。各特定貨物、貨物の價格又は交換價値が、此等三部分の何れか又は凡てに分解せらるゝと同じく、一國全體の年産物も亦先づ勞働者、資本家及び地主の三階級に分配せらる。價格論はSmithを導きて生産物分配論に到達せしめたるなり。斯くしてSmithは順次賃銀利潤及び地代なる三種所得の決定理法を論じて第一篇を閉づ。著者は勞働生産力の論を以て發途して所得形成論を以て終れるなり。

國民中國富生産に從事するものと然らざるものとの比例は何に由て決せらるゝか。Smithは資本の蓄積と其諸用途とを以て之に答ふ。渠は緒論中「有用にして生産的なる勞働者」の語を用ふと雖も、第二篇の本文は、有用なる勞働の必しも生産的勞働ならざることを謂へり（vol. I, p. 314）。生産的勞働と不生産的勞働とは何に由て之を分つべきか。Smithの例示するところに由れば、製造工業に從事する勞

働者の勞働は生産的にして、婢僕の勞働は不生産的なり。Smithは區別の標準を勞働が勞働の加へられたる客體の價値を増し、勞働の結果が具體商品として殘るか或は勞働が何物の價値にも加ふるところなくして、勤勞が其給付の瞬間に消滅するかに求めたり。而して此生産的勞働者は資本に依て支へられ、不生産的勞働者は必ず所得に依て支へらる。從つて一國資本の増減は生産的勞働者と不生産的勞働者との比例を動かし、從つて國富の増減を決すべきの理なり。而して資本は客嗇又は節約に依つて蓄積せられ、浪費に依つて減少す。故に「若し或人々の浪費が別の人々の節約に依て償はるゝことなくんば、浪費者各人の行爲は勤勉なる者の麵麭を以て懶者を養ふことに由りて、啻に其人自身を乞食たらしむるのみならず、また其國を貧困ならしむ」と。又曰く「國富の何を以て成るやを問はず、各浪費者は公共の敵にして、各節約者は公共の恩人たるものゝ如し」と（vol. II, pp. 321-323）。斯の如く生産的勞働は資本に依て支へらるゝものなりと雖も、一定額の資本が動かすところの勞働量はその投下せらるゝ産業の種類に由りて一ならず。Smithは農業鑛山業漁業に投下せられたる資本は最も多量の勞働を動かし、從つて又最も多額の價値を産出し、（二）工業（三）運輸業（四）分配（小賣商業）順次之に次ぐものとなせり。故に一國の資本未だ充分ならざるときは、直ちに上記四産業を併せ營むことなく、先づその最も多量の年生産を擧げ、從つて最大の貯蓄を可能ならしむる農業に專ら之を投じ、次で工商業に及ぶを國富充實の最捷徑とす。

是を國富の本質及び原因に關するSmith所説の大要とす。

（四）

上記のSmithが經濟理論の基礎となり、又其全體を貫くものは、彼れの形而上學的樂天觀なり。英吉利の自然神教deismは十八世紀の後半に於ては既に其盛時を過ぎ、Humeは之を轉じて懷疑主義に陷らしめたりと雖も、Smithに於ては自然神教的思想の猶ほ頗る純粹の形に於て表白せらるゝことを認むべし（Richard Zeyss, Adam Smith und der Eigennutz 1889, S. 107 ff.）。世界は世界、以上世界以外に存する神の創造するところにして、一度神に依て與へられたる法則に服し、機械的に其の定められたる軌道に沿ふて運動す。然るに「彼の偉大なる仁愛全智の實在」は其被創造物の完成幸福を實現せんとの志を以て世界を創造し、又諸法則と秩序とを定めたり。

これAdam Smithの世界觀にして、神の攝理に依て諸物に賦與せられたる發展の諸動力、神が此發展の基礎たらしめたる諸法則と諸秩序とは、Adam Smithが「自然的」と稱するところのものあり。故に自然的なるものは、渠を以て見れば、一方に於ては本源的なるもの、神が欲するところのもの、創造計劃中に存するものゝ謂にして、同時に他面に於て、人類と全世界との爲めに唯一の正當、有用、善良なるものゝ謂なり、Smithの學問上の思索は、人間生活及び人間行爲の有ゆる領域に於て「自然的なるもの」の認識に到達せんことを目的とす。此目的を達せんが爲めSmithは人間の自然的本質の研究、その自然的衝動の分析を以て出發し、而して全智の神は人間に賦與するに自利と仁愛との本能を以てし、又此等本能の發動を合宜のものたらしめんが爲めの同情感情を以てせりとの結論に到達したり。而して此の如き賦性を以て生れたる人間は、單に其自然的衝動の發動に從ふことに依り、期せずして自己一身の幸福と共に全體の維持、完成、幸福を促進すと謂ふ。道德情操論の一節は遺憾なくSmithの此根本思想を窺はしむ。曰く、「宇宙の各部分に於て吾人は生ぜしめんとする目的に對する手段の按排精妙を極むるを見、而して一植物、一動物體の機構に於て、如何に一切のものが個體の保存と種屬の繁殖となる自然の二大目的を進めんが爲めに工風せらるゝかを嘆賞するものなり。然れども是等のもの、及び一切同種の對象に於て、吾人は猶ほ其の幾多の動作と組織との有效原因と終極原因とを識別す。食物の消化血液の循環、之より發する幾多汁液の分泌は、皆動物生命の大目的の爲めに必要なる作用なり。然れども吾人は決して是等の作用を彼の目的を以て說明して、之を其有效原因となさんとすることなく、又決して血液は自ら循環し、食物は自ら消化し、而して循環又は消化の目的を理解し、意圖して之を行ふものと想像することなし。時計の齒輪が皆時計が其爲めに造られたる時の指示なる目的に適合せること嘆賞すべきものあり。其の樣々の運動は、最も微妙の方法を以て此結果を生ぜんが爲めに協力す。假に諸齒輪に此結果を擧げんとする欲求意圖の賦與せられありしとするも、その功を奏すること決して此以上なること能はざるべし。而かも吾人は斯る欲求と意圖とを時計製作者には歸するも、斷じて之を齒輪に歸することなく、又吾人の齒輪の彈條に依りて動かされ、而して彈條も亦其の生ずる結果を意圖せざること齒輪と擇ぶところなきことを知悉

す。然るに物體の作用を説明するに當りては、斯の如く有効原因と終局原因とを區別して誤ることなきに拘らず、心意上の作用を説明するに當りては、吾人は動もすれば此の異なる二物を相混合せんとするの虞れ甚だ多し。吾人の自然的原理に導かれて、修練啓發せられたる理性の可とすべき目的を進むるに至るや、吾人は動もすれば、吾人の依て以て此等の目的を進めんとする情操行動等を、彼の理性に歸して之を有效原因となし、而して實は神智なるものを知らずしてその人智なるべきを想像す」(Theory of Moral Sentiments, Bohns Standard Library Edition pp. 126-7)

又曰く、「斯の如く、自己保存と種の繁殖とは、有ゆる生物を造るに當りて、自然が志したる大目的なるものゝ如し。人類は此等の結果に對する欲求と其反對に對する嫌忌と、即ち生を愛する情と、死を怖るゝ念と、種の永續不滅を欲求する心と、其死滅の想像に對する嫌忌とを賦與せらる。然れども、吾人は斯くして此等の結果に對する甚だ强烈なる欲求を賦與せらると雖も、此結果を實現すべき適當なる方法の發見は、吾人の理性の緩漫不確實なる決定に委せられず、自然は吾人を本原直接の本能に依て此等の目的の大半に向はしめたり。飢渴、兩性を結合せしむる欲情、愛快樂心及び苦痛の畏怖は、吾人を驅りて、其自身の爲めに、彼の諸方法を適用せしめ、而して自然の大支配者が之に依つて實現せんと意圖せる仁慈なる目的に對する其傾向に就ては何等考慮することなくして之を行はしむるなり」と。(ibid. p. 110)

Adam Smith の「彼の偉大なる仁愛全智の實在」に對する信頼は、經濟生活の領域に於ては、その自利心の自由發動の結果に對する樂觀となる。以爲らく、個人はその自家の狀態を改善せんことのみを念頭に置きて、毫も公共の福祉を思ふことなきも此の自利的行動は「見えざる手」に導かれて、自ら全體の福祉を增進せしむるの結果を擧げざることなしと。故に前節に説けるが如く、國富の本質と原因との何なるかを明にするも、Smith を以て觀れば、正義保障の外には國富增進の爲めに政治的制規は之を必要となさゞるなり。Smith は國富增進の大原因として分業を説けり。然れども分業は彼を以て觀れば、素と其の斯の如き偉大なる效果を知りて、之に到達せんが爲め案出せられたるものにあらずして、人間の衝動の已むことを得ずして發生するに至らしめたるものなり。各人自給自足する限り、人間獨特の交

換欲（propensity to truck）は之を滿たすこと能はざるを以て分業は必ず起らざることと能はず。而して此の如くにして起れる分業は、始めて人の能力に異同を生ぜしめ、斯の如くにして生じたる能力の異同は又分業交換を各人に取つて有利ならしむと。これ Adam Smith の分業起原に對する説明なり。

資本の蓄積の國富增進の至要原因にして、而して資本蓄積の節約に由て行はるゝこと又同じく前節に説けり。然らば人をして節約を行はしむるの法如何。此點に於ても亦 Smith は人間天賦の性情に信賴して他の干涉を必要とせざりしなり。渠以爲らく、浪費を促すものは人の現在の享樂に對する欲情にして、貯蓄を促すものは吾人の狀態改善の欲求なり。現在の享樂に對する欲情は時として甚だ强烈にして、之を抑制すること難しと雖も、大體に於て瞬間的偶發的のものたるに過きず。狀態改善の欲求は通常平靜穩和のものなりと雖も、而かも生れてより死する迄遂に吾人を離るゝことなきものなり。人の生涯に於て人は恐らく一瞬時も全然其境遇に甘んじて其改善を希はざる時あらざるべし。而して此事を行はんが爲めの最も普通最も明白の方法は其所得の一部を貯蓄蓄積すること、即ち是故に浪費の衝動は或機會に於ては殆ど凡ての人を動かし、或人々を有ゆる機會に於て支配するものなりと雖も、而かも全體を通じて之を觀れば節約の原則は啻に能く浪費の原則に打克つのみならず、實に大に之に打克つものなり。個人の浪費よりも恐るべきは政府の浪費なり。然れども大多數の場合に於て、私人の節約は優に政府の浪費を償ふ。故に曰く、「各人の其狀態を良くせんとする均一不變不斷の努力は、私富と等しく國富（public and national, as well as private opulence）の由て生する根原の原理にして、屢々政府の浪費と行政の大誤謬とに拘らず、事物の自然的進步改善を優に維持するに足る力を有するものなり。動物生命の未知の原理の如く、啻に疾病のみならず、又醫師の不合理なる投藥にも拘らず、そは屢々組織の健康と活力とを恢復せしむるものなり」と（vol. I, pp. 323-5）。Smith は此點に於ても亦自然に信賴しゐたるなり。

資本投下の順序に就ても亦 Smith に取りては國富增進の爲めに最も有利なる順序は即ち自然の順序なり。彼は資本の先づ農業に投下せられ、次に工業、更に次に商業に投下せらるゝを國富充實の最捷徑となしたりと雖も、此順序は、敢て他の干

涉を待つに及ばず、資本所有者の自利心の發動に任すときは、自ら遵奉せらるゝものなることを信じたり。「自家利潤の考慮は、資本の所有者をして或は農業、或は工業、或は卸賣又は小賣商業の特定部門に之を投下することを決せしむる唯一の動機なり。その此等用途の何れに投せらるゝかに由りて、その動かし得べき生産的勞働量の大小、又その社會の土地と勞働との年生産に加へ得べき價値の多少は、遂に渠の念慮に入ることなきなり。」然るに人の自然的性向は若し人爲の施設の之を妨げざる限り、人をして工業よりも先づ農業に就かしめ、外國貿易よりも工業を喜ばしむ。「故に事物の自然的行路に從へば、發達しつゝある社會の資本の大部分は常に先づ農業に、後に工業に、而して最後に外國貿易に向はしめらる」と。(vol. I, pp. 354, 356-9)

又謂へらく、各個人は其所有の資本の爲めに最も有利なる用途を發見せんと努む。「彼れが念頭に置くところのものは詢に其自家の利益にして、社會の利益にあらず。然れども其自家の利益の考究は、自然的に、或は必然的に、渠を導きて社會の爲めに最も有利なる用途を擇ばしむ。第一に各個人は資本の普通利潤、又は普通利潤よりも甚だ尠からざる利潤を獲得し得る限り、其資本を成るべく其鄉國に近き處に於て用ゐんことを努め、又從つて成るべく內國產業の支持の爲めに之を用ゐんことを努む。……第二に、其資本を內國產業の支持に投ずる各個人は、其生產物の價値を及ぶ限り最大ならしむるが如く其產業を指導せんと努む。……然るに各社會の年々の所得は、常に正に其產業の全年生產物の價値に等しく、或は寧ろ此の交換價値と正に同一物なり。故に各個人が及限り、其資本を內國產業の支持に用ゐ、又其產業の生產物に最大の價値あらしむるが如く之を指導せんと努むる時、各個人は必然的に社會の年收入を及ぶ限り最大ならしめんが爲めに勞役す。詢に公共利益を增進せしめんと意圖することなく、又その之を增進せしむること幾許彼れはなるかをも知らざるなり。外國產業よりも內國產業の支持を擇ぶことに依りて、彼れはたゞ其自家の安全を希ふに過ぎず。又此產業の生產物をして最大の價値あらしむるが如く之を指導することに依りて、彼れはたゞ己れの利得を希ふのみ。而して此場合に於ても、他の幾多の場合に於けると同じく、彼れは一の見えざる手に導かれて其意圖中に存せざる效果を助成するなり。又其の彼の意圖

中に存せざりしことは、必しも常に社會の爲めに不利なるにあらず。彼れは其自家の利益を追求することに依りてその眞に社會の利益を助成せんと意圖する時よりも屢々遙に有效に之を助成す。予は未だ曾て公益の爲めに貿易することを衒ふ者によりて多くの善事の爲されたることあるを知らず」と。(vol. I pp 419, 420, 421)

「見えざる手」の指導に對する信賴は、個人の經濟活動に對する立法者の干渉を有害無效となすの結論を生ぜしむるのみならず、他面に於て Adam Smith の下せる經濟學上の命題に一種の形而上學的意義を帶びしむ。人間の必ず內に促がすものありてする行動は、常に其の行動者が意圖の中に存せざる結果を齎し、而して此の結果は人類又は社會全體の調和幸福秩序を進むることにあるものなり。國民經濟の繁榮は立法者又は個人の任意に左右し得るところにあらず。立法者以外の或者に依りて定められたる法則は、個人をして其意思なくして國民經濟の繁榮に貢献せしむると共に又社會をして有害なる立法施設あるにも拘らず、能く之を排して繁榮幸福の域に向ふことを得しむ。故に Smith は完全なる自由と完全なる正義との實現せらるゝを待ちて始めて社會の繁榮の期すべきことを說げる Quesnai を評して、思辯的なる醫師の中には、人體の健康は食餌、運動の上に於ける養生法を嚴守して始めて之を維持し得るものにして、之に背くときは必ず其の背反の程度に應じて疾病又は障害を來たさゞること能はずと信ずる者あるが如しと雖も、經驗の示すところに由れば人體は決して衛生的ならずと認めらるゝ生活法の下に於ても猶ほよく屢々完全なる健康狀態を保つことを得るものなり。人體の健全なる狀態には人の知らざる或る保存の原理ありて甚だ過てる養生法の惡結果を防止し、又は矯正することを能くするものゝ如し。「自ら醫師にして而かも甚だ思辨的醫師なる Quesnai 氏は、政治的身體に關しても同種の觀念を抱き、その一定の嚴格なる養生法、即ち完全なる自由と完全なる正義との正確なる養生法の下に於てのみ、能く成育繁榮することを得べしと想像せるものゝ如し。氏は政治的身體に於て各人が絕えず怠らざる自家境遇を改善せんとする自然的努力は、多少偏頗にして且つ壓制的なる political economy の惡結果を幾多の點に於て豫防し且つ矯正し得る保存の原理たること考察せざりしものゝ如し。斯る political economy は一國

民の富と繁榮とに向ふ自然的進歩を多少遲からしむること疑を容れずと雖も必しも常に全然之を阻止すること能はず、況や之をして退歩せしむることをや」と（既出）云ひたるなり。Adam Smith の此の根本思想を念頭に置くは彼れの經濟理論を正解する爲めの缺く可からざる用意なりと信ず。

（五）

國富は國民が消費する生活必需品便宜品を以て成ると云ふは Smith が獨創の斷案にあらず。同じ思想は Smith 以前の幾多の經濟學的著作中に之を發見すること決して難からざるなり。勞働を以て國富の源泉となすの說亦然り。Smith に先だつこと百餘年 William Petty がその Treatise of Taxes and Contribution の一節に「勞働が富の父並に發動的元質たること、宛も土地が母たるに等し」の語を記せるは後人の屢々引用するところなりと雖も、是は當時にありても既に時流を拔ける Petty 獨特の思想にあらずして、當時の幾多の述作に現れたる一部經濟論者間に普通の見解なりし事既に學者の考證に依つて明なる處なり（高橋誠一郎、經濟學史研究七七四――七七七）。故に國富の本質と原因とに關する國富論冒頭の斷定に於て Smith は既に幾多の前人の言明せるところのものを更に明瞭に反覆したるに過ぎざるなり。此問題は自ら人を導きて Smith の經濟思想は何人の影響の下に育成せられしものなりやの疑問に入らしむ。而して吾人は彼れの經濟學說中に英吉利傳來のものと佛蘭西のフィジオクラアトより繼承せるものとの二系統の混在併存せることを稍々明かに認むることを得と信ずるものなり。

Adam Smith が其の佛蘭西學者との接觸に依つて果して如何なる影響を受けしかは、嘗て學者論考の好題目たりしものなり。然れども今日に於ては Smith は其佛蘭西旅行の爲めに毫も其哲學的根本思想の上に動搖を感ずることなかりしといふは略ぼ專門學者間の公論と稱するも不可なかるべし。佛蘭西學者との接觸の影響に重きを措くものは、往々此旅行前に著されたる道德情操論と、旅行後に著されたる國富論との根本思想に相容れざるところありと認め、之を佛蘭西思想家の感化に因る Smith の精神的革命に依て說明せんとす。Bruno Hildebrand, Karl Knies, Lujo Brentano が說く所は皆略ぼ此に歸するものなり。而して此見解は von Skarzynski の大膽なる論斷に至つて極まれり。彼れは其 Adam Smith als Moralphilosoph

und Schöpfer der Nationalökonomie 1878 に於て、Smith が其道德上の指導原理として Hutcheson 及び Hume より同情を借り來れる如く「經濟學に於ては同じ目的の爲め直ちに自愛心を採用せり」と云ひ「英吉利に留まれる限り Smith は Hutcheson 及び Hume の影響の下に唯心論者なりき。佛蘭西に行はれたる唯物論に接觸すること三年の後、彼れは唯物論者として英吉利に歸來せり。佛蘭西旅行以前に書ける道德情操論と佛蘭西より歸來の後著されたる國富論との矛盾は、此の簡單なる方法を以て説明せらる」との明言を敢てしたるなり(Citiert bei Zeyss, S. 9-12)。然れども近時の經濟學史家は道德情操論と國富論とは相矛盾するものにあらずして、其に一道德哲學體系を構成する要部として兩者能く相容るゝものなることを認め、正義の埒内に於ける自利心の發動は、道德情操論既に之を容認したることを説き Skarzyski の論斷の如きは Smith の全系統に對する理解の不充分なるに由るものとなす點に於て所説略ぼ一致す。Oncken (Adam Smith und Immanuel Kant 1877—The Consistency of Adam Smith, Economic Journal, 1897) Zeyss, Hasbach, Albert Delatour (Adam Smith, sa vie, ses travaux, ses doctrines, Paris 1886) Bonar, Diehl (Theoretische Nationalökonomie Bd. I, 1916)等が説くところ皆略ぼ此に出でたり。

純經濟學説の上に於ても Smith のフイジオクラアトに負ふところを過大視するは、夙く Dugald Stewart の戒しむるところなり、彼れは佛蘭西學者の作物未だ現れざる一七五二年、又は一七五三年に於て Smith は既に其 Glasgow 大學の講義中に國富論の根本原理を説けることを指摘して彼れの爲めに辯じたり。Stewart の辯明は「正義、警察、收入及び軍備に關する講義」筆記の出版に依りて頗る有力なる支持を受く。此に由つて吾人は旅行發途の前年に於て Smith の經濟學は其骨格略ぼ成れるを窺ふことを得るものなり。而かも猶且つ吾人は彼に對するフイジオクラアトの影響の看過すべからざることを認む。然らば經濟理論上に於て Smith がフイジオクラアトより受けしところのものは何ぞ。Smith 研究を以て聞えたる W. Hasbach, Edwin Cannan の兩家が、此點に關して別の方法によりて下せる推斷に相一致するところあるを見るは喜ぶべし。此推斷を試みるに當りて Cannan は前記 Lectures を有したるを以て Hasbach よりも遙かに有利の地を占めたり。彼れは此の Smith が大陸旅行の直前に試みたる講義の筆記と國富論とを比較し、國富論

にありて筆記に缺くるものを求め、是とフイジオクラアトの學說とを對照して以て後者の影響に歸すべきものを決定せんとしたるなり。Cannan は國富論にありて筆記になきものとして、第四篇末節のフイジオクラチックシステム論評、第五篇第一章敎會と國家との關係に關する一條(同章第三部第三條)第四篇第七章植民地論を敷へたる後に曰く、「然れども是等の附加は之を第二篇にストック又は資本の理論及び不生產的勞働の理論の採用せられ、第一篇の終りに近く、第六章に於いて價格理論中に分配理論の潛入し、又た年生產の概念の力說せらるゝ事に比すると きは意義小なるものなり」と。而して Cannan は是等の變化がフイジオクラアトの影響に歸すべきものなるを推斷す。謂へらく「此等の變化は一七六四——六年 Adam Smith が Buccleugh 公爵と共に佛蘭西滯在中結ぶことを得たる佛蘭西「經濟學者」(フイジオクラアト)との交際に歸すべきものなること論を俟たず。或は渠がその講義筆記の作らるゝに先だちて既に此學派の幾多著作を知ることを得たりしを云ふ者あり。此說理なきにあらず。然れども彼れの講義筆記は、事實上彼れの之れを知らざりし事、或は少くも彼れの彼等の主要經濟學說を未だ消化せざりしことを示す好證左たるものなり。今、講義中に此等諸學說の根跡なくして、國富論中に大に之あることを發見し、而して其間 Adam Smith の佛蘭西に在りて此「派」の著名人士の凡ての者と交り、彼等の師 Quesnay も亦其中にありたることを發見する時、吾人は何等の明證なくして、何故に Smith がフイジオクラアトの影響を其 Glasgow 時代、又は其以前に受けずして、其以後に受けたることを信ずることを禁ぜざるべからざるかを解し難しとするものなり。」フイジオクラアトの學說の心髓は Quesnay が Tableau Economique に收めらる。此表の電形點線の意義を知らんと欲するものは宜しく此表に附屬せる說明を讀むべし。「今吾人に取りては(一)その一國年生產若しくは再生產全額の概念を包含すること、(二)その或種の勞働の不生產的なること、年生產額を維持せんが爲めには「前拂」("avances")の必要なること、及び此の年生產物は「分配」せらるゝことを敎ふることを見るを以て足れり。Adam Smith は其の重農主義論の章の示す如く、此表の細目を評價すること甚だ高からざりしと雖も是等の主要觀念を取りて之を成るべく其の Glasgow 時代の學說に適合せしめんと努めたること確實なり。此等の學說と年生產の概念とは決して兩立し難き

ものにあらず。而して彼れは過つて其舊語法に復歸すること甚だ屢々なりしと雖も、而かも年生産物を取りて一國民の富となす上に於て毫も困難を有せざるなり。不生産的勞働に關しては、渠はGlasgow産業の全部を悉く不生産的なりと宣告するの勇なかりしも、中世の家臣のみならず、更に近世の僕婢をも不生産的階級に編入することを敢て辭せざりしなり。彼れは更に少しく歩を進めて、凡て其勞働の賣買し得べき特定物體を生産せざるもの、又は其雇主の貨幣利得の爲めに雇傭せられざる者をも是と同列に置かんとしたり。……最後に渠は價格と其構成部分の學説中に一貨物の價格が賃銀、利潤、及び地代に分割せらるゝ如く、全生産物は勞働者、資本家及び地主の間に分割せらるとの暗示を潜入せしめたり」と。(Introduction to The Wealth of Nations, pp. XXIX-XXXIII)

未だ「講義」筆記を見ること能はざりしHasbachは、立論の結構、觀察上の立脚點に於てフイジオクラアトの經濟學の主としてHutchesonに依りて傳へらるゝGrotius—Pufendorf—Wolffの自然法學者經濟學と趣を異にする事實と共に、國富論中右記の點に關する相異なる二個の立場の併存せるものあるの事實に着目して、その何れの部分のフイジオクラアトの影響に、何れの部分の獨英自然法學の影響に歸すべきものなりやを確めんとしたり。而して彼れは國富論緒論及び第二篇所論にフイジオクラアトの影響を認め、第一篇を以て獨英自然法學の地盤上に立てるものと斷じたり。(「予を以て見れば、全卷の緒論中に、フイジオクラアトの有機的觀察より一切の偏頗を去れるものゝ痕跡を認むべく、第二篇の最要部分はフイジオクラアトの先行なくんば、恐らく書かるゝこと能はざりしものならん。然るに上記緒論より進みて第一篇の考察に移れば、吾人は直ちに己れの獨英自然法の地盤、即ち交換經濟の地盤上に立てるを見る。」Untersuchungen über Adam Smith a. a. O. S. 165)即ち兩家の推斷は國富論第一篇の主要部分は英吉利傳來のものにして、第二篇の主要部分は之をフイジオクラアトに得たるものなりとなす點に於て相一致す。然らば此兩篇の間には如何なる差異の認むべきものありや。予はCannan. Hasbach兩家の考證を知らざるも、猶ほよく立論の結構、觀察上の立脚點に注意する者が此兩篇が別の經濟學系統の影響の下に成れるにあらざるかを疑ふことあるべきを信ず。

國富論を精讀する者は、其第一篇が篇首の分業論を除くの外殆ど皆交換現象の

說明を以て終始することを發見すべし。即ち Adam Smith は筆を分業に起し、市場、交換、貨幣を經て價値價格に及び、更に價値價格より進んで其構成部分たる賃銀利潤地代の說明に到達す。論の主題たるものは常に物と物と、(價値價格、利潤地代の場合に於けるが如く)若しくは物と勤勞と(賃銀の場合に於けるが如く)の交換にあらざるはなし。國富論第一篇は題して「勞働の生産力增進の諸原因及び其生産物の人民諸階級間に自然的に分配せらるゝ秩序に就て」といふも、勞働生産物の分配が此篇の主要題目たらずして、僅に價格論の附屬物として價格論の章中に挿入せらるゝに過ぎざることは既に Cannan の指摘するところなり (Theories of Production and Distribution etc. 2nd ed. 1903 p. 186)。即ち Smith は各貨物の價格が賃銀利潤及び地代、又は賃銀と利潤と、又は賃銀と地代と、又は獨り賃銀に分解せらるゝことを說明したる後「各特定貨物の價格又は交換價値が夫れ〳〵彼の三部の何れか又は凡てに分解せらるゝと同じく、各國勞働の全年生産物を構成する一切貨物を綜括して見れば、その價値又は價格は同じ三部分に分解せられて、國の樣々なる住民の間に或は其勞働の賃銀として、或は其資本 (stock) の利潤として、或は其土地の地代として配分せられざるべからず。各社會の勞働に依りて或は聚集せられ、或は生産せられたるものゝ全部、又は(畢竟それと同一物なる)其全價格は、此の如くして先づ其諸成員の或者に分配せらる。賃銀利潤及び地代は凡ての所得並に凡ての交換價値の本源的三源泉なり」と云ふも (vol. p. 54)、次に來るものは此三種所得の說明にはあらずして自然價格と市場價格とを論ずる一章なり。此章に於て彼れは「一貨物の價格が之を産出し、之を準備し、之を市場に販出する爲めに用ゐられたる土地の地代、勞働の賃銀、及び資本の利潤の宛も其自然率に適合せるものを支拂ひて正に過不及なきときは、貨物は其自然價格と稱すべきものを以て賣られたるものなり」となし (vol. I. p. 57) 更に「自然價格其者は、其構成部分の各個、即ち賃銀、利潤及び地代の自然率と共に變動し、而して此率は各國に於て、其貧富、其狀態の進歩、停滯又は沈衰に由て變動す。予は次の四章に於て此等樣々なる變動の諸原因を及ぶ限り充分且つ明瞭に說明せんことを努むべし」と云へり。而して次の諸章に說く所を以て窺へば、彼れは賃銀利潤を以て貨物價格の原因となし、地代を以て其結果となすものなり (vol. I, p. 147)。右に說くところを以て見れば、國富論第一篇は物と物と、又

は物と勤務との交換行程上に於ける諸現象を主題とし、全國民經濟の包括的見地よりせる分配理論は、其間にありて稍々異質物夾雜の觀を呈せりと云ふも甚しく不可ならざるべし。

然るに進みて第二篇に入れば、吾人は Adam Smith が其觀察の視角を一轉し、目を交換行程より離して、財の自然より採取せられ、生産、製造せられ、分配せられて、遂に其終局消費者の手に到達する迄の全行程を包括的に概觀せんと試みたることを認む。此全行程は、現社會に於ては交換を通じて行はるゝを本則とすと雖も、交換なき社會に於ても亦等しく行はる。故に强いて云へば、Adam Smith は國富論第一篇に於ては專ら交換價値又は價格現象を究め、第二篇に於て全國民經濟に對する貨物供給の理を明にせんとしたりと謂ふも甚だ失當ならざるべし。固より第二篇中に於ても、資本利子論(第四章)貨幣論、銀行論(第二章)の如き、交換行程其者を對象とするか、或は之を前提する理論の考究せらるゝものなきにあらずと雖も、本篇の最要部を成せる資本本質論、生産的及び不生産的勞働論、資本用途論に就ては、予は予の上記の言に大過なきことを信ず。本篇に於て Smith は先づ一個人の所有に屬する貨物の蓄積に、所得贏得の用に供せらるゝ部分と、直接消費に充てらるゝものとあるを云ひて、資本と資本ならざるものとを分ち、更に資本を其所有者に利潤を齎す爲めに其手を離るゝことを要すると然らざるとに由て流通資本と固定資本とを分てる後、一社會の貨物をも同じく直接消費に充當せらるゝものと固定資本と流通資本との三部に分てり。彼は固定資本及び流通資本の唯一の目的が消費用貨物を維持增加するの外に存せざることを云ひ、一社會の固定資本を構成するものとして、(一)機械、用具(二)營業用建物(三)土地改良(四)社會屬員の修得せる有用能力を擧げ、流通資本として、(一)貨幣(二)賣手の手中に存する食料品(三)衣服、家具、家屋の原料及び(四)未だ消費者の手に歸せずして、商人又は製造者の手中に存する完成品を擧げ、而して此區別を基礎として一社會の總收入と純收入との關係を論ず。其大意に謂へらく、個人の場合に於ては、其純收入は其總收入より固定資本の維持費と流通資本とを控除したる殘額を以て成ると雖も、社會全體にありては趣を異にし、其總收入をなすものは其國の土地と勞働との年生産全額を以て成り、此より其固定資本と流通資本中の一部たる貨幣との維持費(補充費)を控除したる殘額、純收

入を構成す。故に技術の改良に依つて固定資本の製作維持の費用節約せらるゝことを得ば、純收入はそれ丈け增加すべきの理なり。然るに一社會の流通資本は、上記の如く、(一)貨幣(二)食料(三)原料(四)未だ消費者の手に歸せざる完成品の四種より成るも、此中貨幣以外のものは何れも究局或は固定資本となりて終るか、或は消費者の手に歸して消費せらるゝか何れかなるを以て、流通資本たるはその一時的形相に過ぎず。即ち貨幣以外の流通資本中、固定資本となりて終るもの(固定資本の維持に費さるゝもの)の外は悉く消費財となりて社會の純收入を構成す。故に社會の純收入は貨幣以外の流通資本維持の爲めに決して削減せらるゝことなし。此點に於て、貨幣は他の流通資本と其性質を異にして、寧ろ固定資本に近きものあり。貨幣はもと交換要具にして、消費貨物を社會各員の間に分配するの用をなすと雖も、終に自ら消費財たることなく、從つて社會又は個人の收入を形成することなきを以て、若し貨幣維持の爲めに要する費用を節約することを得ば、それ丈け純收入を增加せしめ得べきこと固定資本維持の費用を節約し得たる場合と異なることなし。紙幣を以て金銀貨に代ふるに正に此事を行ふ所以なりと。

此一段の理論は、謂はゞ國民經濟の全生活行程を通觀して、全國民經濟の收入と費用とを說明せんとしたるものなり。而して前に其一端を略說せる、資本蓄積に關する學說も、亦略ぼ同じ見地よりして全國民經濟の收入に貢獻する勞働の果して何たるかと、斯る勞働に從事する者の然らざる者に對する比例の果して何に由りて決せらるゝかを明にせんとするものなり。而して此等第二篇の主要學說は交換行程上に起る現象を殆ど眼中に置かず、又交換現象に關するSmithの諸學說と殆ど沒交涉に編出されたるの觀あるなり。

今Smithの「講義」を取りて見るに、上記の如き國民經濟の全生活行程の通觀は此時代のSmithの殆ど全く知らざるところなりしものゝ如し。(ibid, Table of Parallel Passages in the Wealth of Nations XXXVI-XXXVII 參看)而して此の講義に缺けたるものは、正にフイジオクラアト經濟學の特長となすところのものなり。Hasbachは獨英自然法經濟學者(Grotius-Pufendorf-Wolff-Hutcheson)の經濟學とフイジオクラアトの經濟學とを比較して、其各自の特色を擧げて曰く、「…獨英自然法經濟學は、理論を財及

び勞働の交換に依つて喚起さるゝ諸現象の學に歸着せしめたるに反し、フイジオクラアトは財の生産、分配、消費の全過程を始めて嚴密なる解剖の下に置けり。獨英經濟學は交換社會を前提し、佛蘭西經濟學は國民經濟的有機體を前提す。前者は哲學者及び法學者の建設大成するところにして、後者は、もと其專門學に依りて此種の觀察に慣れたる一醫師、一自然研究者の業たるなり。……フイジオクラアト學說の價値は、之を獨英自然法經濟學說に比するときは明瞭に顯はる。前者には有ゆる現象を一原理より演釋し、個々の領域を相互に關係せしめ、國民經濟を國家經濟と最も緊密なる關係に置く考察の簡易と統一とあり。一言以て蔽へば、國民經濟及び國家經濟の有機的考察あり。而して此はまた始めて國民經濟的に有用なる勞働の問題解決の法を敎へたるなり」と(Untersuchungen S. 161, 163)。佛蘭西旅行後に於ける Adam Smith の最大の努力の一は、その既に有したる、交換經濟の理論と、別の見地に立てるフイジオクラアトの國民經濟の有機的考察との融合を試みることにありたるものと謂ふことを得べし。此努力の成果は決して完璧を以て許すべからず。管に國富論第一篇に於ける分配理論が異物夾雜の觀を呈せること前記の如くなるのみならず、貨幣理論の一度第一篇中(第四章)に說かれて又第二篇第二章)に現るゝが如き、資本利潤論の第一篇中にありて、資本利子論の第二篇に在るが如き、stock なる一名辭の第一篇に於けると第二篇に於けるとに由り其の意義を同うせざるが如き、更に第二篇に於ける主要理論と第一篇に於ける價値、價格、所得理論との間に殆ど何等の有機的交渉なくして、第二篇の理論には第一篇の理論あるもなきも妨げざるが如き觀あるは、Smith の努力の猶ほ不充分なりしことを語るものと謂ふことを得べし。故に Hasbach は、Smith の經濟學に上記二系統の明に併立して未だ渾然たる一體を成すに至らざることを、Arve, Rhone の二河のジユネエヴの下に會流して、而かも猶ほ暫く水色清濁の別の截然たるに喩え(a. O. 164-5)、Cannan は「分配理論は、第一篇の標題中に現はると雖も、本書の本質的部分にあらずして、第一篇第六章の數節と自餘の數行とを抹殺することに依りて容易に削除せらるべく、假に第二篇にして全然省略せらるゝも、他の諸篇は完全に自立することを得べし」と斷じたり。(Introduction p. XXX)

Smith の經濟學系統が未だ渾然たる一體を成すに至らざりしこと上記の如くな

りと雖も、所謂獨英自然法學派の交換經濟理論と、フィジオクラアトの有機的國民經濟觀とは、當時の經濟學界に於ける最大の二潮流にして、此の二者を融合して一たらしめんとするは、大望ある學者の始めて敢て試みるところならん。今兩系統融合の努力の成果は完璧を以て目すべからずと雖も、此二系統を包容することに依りて、Adam Smith は當時に於ける基礎最も廣く、規模最大なる經濟學系統を建設せんとしたるものと謂ふべし。これ Smith の偉大なる功業の一なり。

（六）

斯の如き大規模の經濟學系統を構成する個々の經濟理論は如何なるものぞ。予は Adam Smith の大才の綜合集成に宜しくして、理路の透徹、分析の精緻は所詮その長技にあらざりしことを言はんと欲す。例へば Diehl と共に「價値價格に關し、賃銀利子地代等に關する彼れの理論的推究は矛盾に滿ち、全然透徹と明確とを缺けり」と言はんと欲するなり。今國富論第一篇より價値價格理論、同第二篇より資本理論を取りて其大概を敍すれば、人をして上記の評語を首肯せしむること決して難からざるべし。

Adam Smith は價値なる語に特定物の利用、即ち「使用上の價値」と、一物の所有が賦與する他物購買力、即ち「交換上の價値」と二義あることを指摘したれども、前者に就てはたゞ其大小の必しも後者の大小と並行せざる一事を擧ぐるの外全く言ふところなきを以て、其價値論は交換價値論を以て終始したりと謂ふべきなり。而して交換價値に就て彼が說く所は畢竟一物の既に有する價値は此貨物に由て購買若しくは支配し得る勞働量に由て測定せられ、一物と他物との交換比例に就ては、「彼の資本の蓄積と土地の占有とに並に先だつ初期野蠻の社會に於ては、諸物の獲得に必要なる勞働量の比例は、その相互交換の規則たるを得べき唯一の事情なるが如」きも、此二事行はれたる後の文明社會に於ては「通常一貨物の獲得又は生産に投ぜらるゝ勞働も亦その通常購買し、支配し、又は之と交換せらるべき勞働量を左右し得る唯一の事情たらず」して、貨物の生産に參加せる勞働、資本、及び土地に對する賃銀、利潤及び地代之を左右すと云ふに歸着するものゝ如し。（拙稿「リカルドオの價値論」三田學會雜誌第十六卷第三號五六――七三頁參照）。然れども彼の價値論を斯く解釋するは、その價値價格に關する章、價格構成要素に關する諸章に記す

る所を綜合して Smith の眞意茲に在るべしと斷ずるに過ぎず、右記の解釋と相容れざるが如き章句に逢着することは屢々なるは予の決して否認せざるところなり。

先づ Smith は「…勞働は有ゆる貨物の交換價値の眞尺度なり」と云ひ、而して其意味は貨物の價値は之と交換せらるゝ(即ち之に支配せらるゝ)勞働量に由て測定せらると謂ふにありと認めらるると雖も、渠の論據は必しも人をして首肯せしむるものにあらず。渠は恐らく Hutcheson の暗示を利用して (System of Moral Philosophy vol.II p 58參照)、一定量の勞働の勞働者其人に感ぜしむる不快苦痛の常に不變なる一事に、その價値の尺度たるに最も宜しき理由を求めたり。然れど一定量の勞働の苦痛の勞働者に取りて常に同じきことは、必しも「支配せられたる」勞働のみが價値の尺度たるに適する理由とならざるべし。同じ苦痛を意味する一定量の勞働と交換せらるゝ貨物は、常に其價値等しと謂ふことを得べくんば、同じ苦痛を意味する一定量の勞働が費されある貨物は、常に其價値等しと云ふも亦不可なかるべし。姑らく此點を措くも、右述の如き價値の尺度を說く前後に接して、十六世紀亞米利加に於て金銀鑛發見の後「是等の金屬を鑛山より市場に持來るに勞働を費すこと少きを以て(As it cost less labour)その其處に搬出せられたる曉に、購買し又は支配し得べき勞働は減少す」と云ひ、又「有ゆる時、有ゆる處に於て、到達に困難なるもの、即ち獲得の爲めに勞働を費すこと多きものは高價にして、容易に、即ち極めて僅少の勞働を以て獲得せらるゝものは廉價なり」(vol. I, pp. 34-5)と云ふが如きは、徒らに讀者を惑はすこと甚しきものとせざるべからず。是と關聯して起る疑問は、生產に投ぜられたる勞働量が貨物の交換比例を決定するは原始社會に限りて在る事なりや否や是なり。予は前に此問を肯定したれども、是は學者間に異論なきにあらず。例へば Zuckerkandl の如きは解して、Smith の眞意は交換價値が常に勞働のみに依て定められ、利潤及び地代は斯く定められたる價値の控除を意味するものにして、價値價格は爲めに變動を閲することなしと謂ふにありとなせり。(Zur Theorie des Preises, 1889 S. 247-252) 此解釋の價値價格論及び所得論全體の結構上結局容認し難きことは些か上記拙稿中に之を辯じたりと雖も、Smith に此の如き解釋を誘ふ章句甚だ多きことは吾人の敢て否認せざるところなり。

Zuckerkandl 等の解釋を是認すべきや否やは、畢竟價値は果して利潤地代の爲め

に增加するや、或は利潤地代は別に定まれる價値を蠶食するものなりや否やに歸着すべし。地代は姑らく措き、利潤に就ては Böhm-Bawerk は Smith が正反對の兩說（生產力說の萠芽と見るべきものと、社會主義的利子學說の萠芽と見るべきものと）を同時に唱へたることを指摘し、此矛盾を彼が深く此問題を考へずして時々の印象に動かされたることに由るものと解したり（Geschichte und Kritik der Capitalzins-Theorien, 1900 S. 83-6）。Böhm の評語の當否は問はず、Smith の說に曖昧矛盾不透徹多きは讀者の今漸く認むるところならん。

更に疑なき能はざるは地代と價格との關係に關する Smith の說なり。渠に從へば、一貨物の市場價格は其自然價格に吸引せられ、絕えず是に歸着せんとして其周圍に旋廻すと謂ふ。一貨物の自然價格とは、價格構成の三要素たる賃銀、利潤及び地代が各其自然率の合致せる場合の價格を謂ふ。而して所謂價格構成要素の自然率とは、一社會又は一地方に於ける普通率又は平均率の義なり。市場價格とは或貨物が現に市場に於て賣買せらるゝ價格なり。市場價格は現に市場に販出せられたる貨物量と有効需要との關係に由りて決せらる。有効需要とは絕對的需要にあらずして、敢て貨物の自然價格を支拂ふことを辭せざる者の需要の義なり。貨物量有効需要を滿たすに足らざるときは、其の市場價格は自然價格以上に騰貴し、貨物量有効需要に超過するときは、市場價格自然價格以下に下降す。然れども、一貨物の市場價格その自然價格以下に在るときは、價格構成要素は其自然率以下に下降せざることを得ず。然るに賃銀、利潤又は地代の其自然率の下に下降するときは勞働資本又は土地は其現用途より撤回せられて、貨物の供給を減少せしめ、反之一貨物の市場價格自然價格以上に在るときは、その生產に參加せる勞働、資本及び土地の何れかは必ずその自然率以上の報酬を受くるを以て、勞働資本又は土地は、他より吸引せられ來りてその供給を增加せしめ、何れにするも究極貨物量をして有効需要に一致せしめずんば已まざるなり。故に曰く、自然價格は……謂はゞ絕えず一切貨物の價格を吸引する中心價格なり」と（p. 60）。然るに地代は Smith が地代論中に說くところに從へば、土地生產物の普通價格より、投下せられたる資本を回收し、併せて普通利潤を控除して猶ほ剩ある場合に始めて生ずるものにして、此餘剩なきときは地代は生せず。而して土地生產物の價格は、需要之を決すと

云ふ。即ち地代は賃銀及び利潤と其生產物價格に對する關係を殊にするものなり。故に曰く、「賃銀及び利潤の高低は價格高低の原因にして、地代の高低は其結果なり。特定貨物の價格の或は高く、或は低きは、之を市場に搬出する爲め支拂ふことを要する賃銀及び利潤の或は高く、或は低きが爲めなれども、地代の高く、低く、或は悉無なるは、貨物の價格の或は高く、或は低き爲め、彼の賃銀と利潤とを支拂ふに足る以上大に餘剩あるか、少しく餘剩あるか、或は全く餘剩なきかに由るものなり」と (vol. I, pp. 145, 146, 147)。然れどもこれ果して前の市場價格と自然價格との關係に關する Smith の説と善く相容るゝものなるか。地代の有無多少は、生產物價格に由て決せらると謂ふ。然るに生產物の市場價格は、其自然價格に支配せらるべき約束なり。自然價格は各其自然率に合せる賃銀、利潤及び地代の三者之を合成す。然るに地代は生產物價格を俟つて始めて決せらると謂はゞ、地代の自然率の與かり決すべき生產物の自然價格は、自然價格に由りて左右せらるべき市場價格に由りて左右せらるべき理なるを以てなり。

Smithの地代論に於ては、食物生產の用に供せらるゝ土地は必ず地代を生じ、食物以外のものゝ生產に供せらるゝ土地は之を生ずることあり、生ぜざることありと謂ふ其説 (vol, I, pp. 147, 162) 甚だ首肯し難しと雖も、既に是に先だちて、彼れが價格と地代との關係に就て説くところは讀者を當惑せしむること甚し。Ricardo が之を看過放置すること能はざりしはその當に然るべき處なるのみ。

資本本質論に於ては、Smith は今日の用語に所謂私經濟的見地と國民經濟的見地とを或は區別し、或は混同したる爲めに其説に錯亂を招致したり。Smith が個人の所有に屬する財の蓄積量を、その所得贏得の用に供せらるゝと、直接消費の用に充當せらるゝとに由りて資本と資本ならざるものとに分ち、更に前者を同一人に繼續保有せられつゝ利潤を生ずると、所有者を更ふることに由りて利潤を生ずるとに由りて、固定資本と流通資本とを分ちたる後、視角を轉じて更に一國又は一社會の stock をも同じ標準に由て(一)消費用財(二)固定資本及び(三)流通資本に分たんとしたるその、果して當時の用語例に背反せざりしや否やは措き、此事直に論理に反するものにはあらず。然れども彼れが一社會の固定並に流通資本として列擧

したる諸項目の財とその是に關聯する説明とを稍〻詳かに覩ふときは、彼れが行論の途上に於て分類の標準を二三にしたること爭ふべからざるなり。

前節に一度掲げたる如く、Smith は一社會の固定資本として、(一)勞働を容易簡約にする機械器具(二)店舗倉庫、仕事場、農場建物等の如く、啻に其所有者に賃料を齎すのみならず、併せて其利用者の爲めに所得を生ずる建物、(三)開墾、排水、圍墻、施肥等の土地改良(四)國民が修得せる有用なる能力を擧げ、流通資本として(一)貨幣(他の流通資本を流通せしめ、之を適宜分配するの作用をなすところの貨幣)(二)販賣者の手中に存する食料品(三)衣服、家具、家屋の原料(四)未だ消費者の手に移らず、生産者又は商人の手中に存する完成品を擧げたり。此の資本と資本ならざるものとの區別は、近時の學者の生産財と享樂財と、又は間接財と直接財との區別にあらず。Smith は個人資本に於けると同じく、依然として區別の標準を所得を生ずると否とに求めんとしたること明なり。即ち衣服食料品の如きものを直ちに資本非資本の何れにも編入することなく、その消費者の手に在ると、販賣者の手に在ると、或は之を消費用 stock となし、或は之を資本とす。社會的資本を説くに當りても、彼れは財の所有者の立場に在りて資本と非資本とを區別せんとするものなり。然るに Smith は此標準を以て一貫することなく、或場合に於て技術的生産の有無を以て、取捨を決せんとす。即ち彼れが住宅は如何なる場合に於ても社會的資本たることなしと謂ふは、即ち是なり。住宅の終に社會的資本たることなき理由として、彼れは家屋其者の何物をも生産すること能はざることを擧げたり。曰く「故に家屋は其所有者には收入(家賃)を生じ、從て其人に取りては或は資本の用を爲すべしと雖も、社會一般に對しては何物をも生ずること能はず (it cannot yield anything to the public)。又社會に取りて資本の用をなすことなし。人民全體の所得は之に依て毫も增加することなきなり」と(vol. I, p. 263)。然るを以て國民全體の所得を增す資本とは畢竟新たに物を生産する資本の謂なりと解せざるべからず。茲に至つて社會的資本と然らざるものとの區別は、生産要具と享樂財との別に歸着す。然るに今是を以て區別の標準となすときは、Smith が販賣者の手中に存する食料品、生産者、又は商人の手中に存する完成品を社會的資本中に數ふるの理由を解すべからざるなり。享樂財其物はその何人の手中に存するも、技術上享樂財たることを

失ふものにあらざるを以てなり。

Adam Smith は所得を生ずることの有無を以て資本と非資本とを分ち、同時にまた貨物の生產に貢獻すると否とを以て之を分たんとせり。然るに財の所有者に所得を生ずるものが必しも新貨物を生產するものにあらざることは、Smith 明に之を認む。Smith 之を言はざるも、新貨物生產の用に供せらるゝもの、必しも其所有者に(貨幣)所得を齎らすものにあらざること亦明なり。此二概念の混同は渠をして上記の如き不可解の說をなさしめたるなり。Spiethoff は評して謂はく、「Smith は其出發點たる二の立脚地の差別を看過して、己れの着眼したる兩個の特性に應じて、純一なる財の分類をなすことを怠れり。否な渠れは所得が、財其者の生產力より生ずることを求めて、所得を生ずることゝ、生產力との二性質を混同し、之に依て次の二世代の爲めに道路を擁塞したるなりと」。(Lehre vom Kapital. Die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre) K. Knies は嘆じて謂へらく、資本の定義にありては、問題は普通學問上に於ける定義の當否と稱するものとは些か趣を異にす。異說ありて決せざるは、抑も「資本」の名を以て呼ばるゝ物體其者にして、一般に人の認めて資本となすところのものゝ特徵を、如何にして概括すべきかの問題にあらざるなり。存する資本なる名稱を、抑も如何なる物體に命ずべきやに關して一致を見ることは能はざるなりと(Geld und Kredit, 1885 I. Abt. S. 24, 25)。此紛糾を來たさしめたる上に於て Smith は決して罪を後人に負ふところなしと謂ふべからざるなり。

理論家として Adam Smith の病は其推究の出發點の謬れることにあらずして、其出發の際に於ける立脚地を固執せざることにあり。自家の見地と相容れざる觀察を峻拒する潔癖を有せざること是なり。渠の健全なる常識と、收受力に富める頭腦とは、終に彼れの透徹一貫せる理論家たることを妨げたり。理論家としての彼れは恐らく Halbheit の評語を避くること能はざるものならん。故に Adam Smith の後には必ず其系統中に存する矛盾を除き、曖昧を去り、雜駁を整理する者出でざるべからず。Hasbach 評して、道德情操論は其前人所說中の價値あるものを悉く吸收して、一派の倫理學を其完結の域に達せしめたり。故に此書よりしては新發展の起ることなきに反し、國富論は完成品にあらずして缺陷に滿ちたり。これその後人の思索を刺戟する所以なりと(Untersuchungen S 422)。此評語はよく Adam Smith を知る人の首肯するところたるべし。(完)